



Tanaka Rieko
田中理絵子さん

平成9年卒 図案科
(宇治市立東宇治中学校出身)
企業漫画家

「漫画」と聞くと、雑誌やwebで掲載されているストーリー漫画を思い起こす人が多いと思いますが、私が今取り組んでいるのは企業の広告やビジネス書などを漫画で描き起こす企業漫画です。

私は成安造形短期大学を卒業後、しばらくフリーターをしながらデザインを勉強し、DTPデザイナー・グラフィックデザイナーとして勤務した後、フリーランスのイラストレーターとして独立しました。がむしゃらにイラストの仕事をこなしていくうちに、広告漫画の依頼が徐々に増え始めます。もともと漫画を読むのも描くのも好きだったので面白そうだと思い、どんどん受注していました。続けるうちに、企業や著者の想いを乗せて漫画にするという作業は奥が深く、クライアントとユーザーを繋ぐ新しいビジュアルコミュニケーションだということに気付きました。それはある種の広告革命だったと思います。クライアントからも多くの喜びの声をいただくようになり、大きな活力になりました。



今では書籍のお仕事もしています。文章だけではわかりにくい専門書や生活に役立つ本などの漫画化は年々需要が高まっており、いろんなジャンルの書籍が漫画でリメイクされています。これからはメディアミックスも視野に漫画の可能性を広げる新しいチャレンジができればいいなと思っています。

銅駝での私は図案科でしたのでグラフィック、テキスタイル、立体、製図…世の中にある“デザイン”と名のつくものはおおよそ学ばせていただきました。もちろん勉強ではあるのですが、私にとっては何もかもが新鮮な“体験”でした。

キャラクターを描く時、背景を描く時、服の柄を描く時…これら全てに高校で習った実習が役立っています。製図などは特に苦手だったのに今ではパースで背景を描いているのだから驚きです。

またアイデアを出す時に多角的な見方ができるようになったのは、高校で個性豊かな仲間と一緒に学べたことが大きいと思います。数々の個性に触れることで視野が一気に広がり、「こんな発想があるんだ!」「こんな作り方もいいんだ!」という刺激を毎日受けていたので、自由な発想力は銅駝で培われたものだ実感しています。

仲間といえば、放課後みんなと教室でおしゃべりしながら作業していると、楽しくてすごく歩いたのを覚えています。ほとんどは制作と関係ない話をしていたのですが、そこは個性的な銅駝生。会話の中にも面白い発見がいくつもありません。あの時間も今となっては貴重です。

社会に出ると、時には厳しい条件を課せられることもあります。そういう時、ふと高校時代を思い出すと勇気が湧いてきます。絵を描くこと、ものを創ること、仲間と協力して生み出すこと。仕事になっても「良いものを楽しんで」



創ろうという気持ちはあの頃と何も変わっていません。

銅駝での濃密でゆったりとした3年間は間違いなく礎となって日々の仕事に還元されています。



Kino Satoshi
木野智史さん

平成18年卒 陶芸科
(京都市立桃山中学校卒)
陶芸家

私は今、京都と台湾で陶芸家として作家活動をしています。京都精華大学を卒業、京都市立芸術大学大学院を修了後、大学や高校で非常勤講師として勤めながら個展や公募展を中心に作家活動をしてきました。作品発表の場が増えてきてからは作家活動一本に絞り、海外での発表に対応するべく工房を増やし、現在では京都と台湾の二つの工房を行き来しながら制作する日々を送っています。

中高生の時、私は自分の夢というもののがわからずに悩んでいました。それでも何か手でモノを作ることが好きだった私は銅駝で陶芸をはじめとした美術工芸を学び、大学卒業後も続けることでたくさんの作家、作り手、クリエイターやデザイナーなど陶芸を超えた幅広い分野の方と知り合い、世界で日本の陶芸をもっと評価してもらいたいという夢も出来ました。世界中の美術館で作品を展示・コレクションしてもらえるようになりました。それは好きな事を精一杯取り組むことが出来る銅駝での高校生活があったからだと思っています。特に美工作品展では、制作は楽しいだけではなく時に苦しい。しかしそれを乗り越えるからこそ人の心に触れる作品を作れるということを感じた最初の時でした。それは、作家になってからも変わらず大切にしている思いです。



また銅駝で学んだデッサンや色彩構成などの基礎や美術史は現在も制作や制作論を作る上で今でも非常に重要な要素となっています。他の作家と比べて高校生という若い時期に基礎をしっかり学べたのも大きなアドバンテージになったため、作家として比較的若い時期から評価してもらう理由になったのではないかと考えています。

作家として社会に出てから思うことは、同世代の30代の社会人の本当に多くの方がやりたい仕事が出来ていない、趣味や好きな事がないということ。そして好きなことを仕事に出来ている自分は幸せなのだ



ということです。確かに作家は一般的な職種と比べ収入的に安定している仕事ではないかもしれませんが、自分で決めた好きな仕事ですからどんなに苦しい時も後悔や辞めたいと思ったことはありません。銅駝にいた学生時代のように、同じ好きな事に本気で取り組んでいる仲間とともに楽しく仕事し、会社として二つの工房を経営出来ています。

銅駝の皆さん、自分の好きな事を一生懸命続けてください。今、夢がなくとも自分の将来が想像出来なくても大丈夫です。自分が一番やりたいことを後悔しないようにやり切れば、きっと他の人とは違うあなただけの特別な存在になります。仕事も日常も充実した人生になります。自分が心から惹かれるものを信じて、頑張ってください。

